

人 格 部 門

日本における性格研究の動向と展望

山 崎 勝 之

(鳴門教育大学人間形成講座)

1 はじめに

性格に関する内外の研究史は古く、その研究もおびただしい数にのぼっている。最近にいたってもその勢いは衰退することなく、ここ1年のわが国の研究をみても、多彩な研究が数多く実施されている。その中で、本論文は、ここ1年(2000年7月～2001年6月)に発表された、わが国における性格に関する心理学的研究について、その動向を中心に概説し、あわせてこの研究領域の今後の展望を行う。

性格研究の発表の場は様々であるが、その内容の詳細を知ることができるという点では、雑誌論文を参照することになる。しかし、性格関連の研究は雑誌論文、とくに学会誌に掲載される件数は少なく、学会発表どまりの研究が多い。これは、性格研究で扱う変数について、その概念の厳密性や測定精度を高く維持することができず、方法を中心に問題を孕みやすい研究内容になることに一因があると考えられる。そこで、本年(2001年)の教育心理学会における発表論文集は、わが国における、ここ1年の研究傾向を調べるための貴重な資料となった。また、雑誌論文では、性格研究が多方面の雑誌で取りあげられていることから、本論文では、教育心理学研究をはじめとし、心理学研究、性格心理学研究、心理臨床学研究、心身医学、犯罪心理学研究、教育実践学研究、青年心理学研究、健康心理学研究、発達心理研究の各学会誌を参照した。さらに、性格研究は、学会誌以外の大学紀要に報告されることが多いことから、学会誌以外の雑誌を参照し、この点については国会図書館の雑誌記事索引データベースを利用して、論文題目に「性格」、「人格」、「パーソナリティ」のいずれかの用語を含む論文を参照した。また、出版書籍についても、教科書や一般普及書的な書籍を除き参照した。こうして、ここ1年の研究資料を収集・参照したが、その紹介に際しては、この期間外の研究も必要に応じて随時取りあげた。

本論文は性格研究にかかわるものであるが、上記の資料から該当する論文を引き出す規準を客観的に設定することはむずかしい。研究では、性格変数を大きく取り扱っているものもあれば、付随的に取り扱っているものもあり、性格変数が付随的な取り扱いをされている研究は原

則として参照しない姿勢をとった。つまり、性格の変数が、独立変数や従属変数などで中心的な位置をしめる研究を取りあげる方向で資料を収集した。また、この性格についても、次節で指摘するように、何をもって性格とするのかという問題に至ってはさらに恣意性が入る。この点では、教育心理学会の発表論文集の人格部門で発表された研究でも、性格研究とするかどうか意見がわかれる発表も少なくない(但し、この発表論文集に限っては、人格部門での発表は一部の例外を除いてすべて参照した)。本論文では、次節で展開する性格概念におおよそ合致する特性を扱う研究を参照したが、この規準は曖昧であり、どちらかという、拡散する方向でその概念規準を設定して資料を収集した。

こうして以下の節では、性格の概念の取り扱いから性格の測定方法で特記すべき研究の紹介へ進み、その後は、ここ1年の研究でその他の特記すべき研究テーマを挙げて紹介する。そして最終的に、性格研究領域全般の研究上の問題点を今後の展望とあわせて考察したい。なお、論文中では、引用研究のうち、本年の教育心理学会発表論文集については発表者(発表番号を含む)のみを記載し、文末の引用文献ではその記載を省略した。

2 性格の概念の取り扱いとその測定

性格について書かれた書籍をみると、「性格とは何か」という節や章がかならずある。そこでは、性格、人格、気質などの区別を含めて性格の定義についての言及がなされる。たとえば、Allport(1961)の定義などが引用され、「個人の内にあって、個人に特徴的な行動や思考を決定する精神身体システムの力動的な構造」という性格の定義が採用される。このような定義には、反論材料は少なく、ほぼ全面的に賛同するのであるが、さて、実際の研究になるとこのような大きな定義から規定される部分はほとんど見えず、研究に際しては指針としての役割をほとんど果たしていない場合が多い。しかし、少し踏み込んで性格の構造に上下の層を想定する位層説や性格の諸側面の強調点が異なる各派の性格把握の違いは、実際の研究のあり方に大きな影響を及ぼすはずである。たとえば、2年前に出版された Friedman & Schustack(1999)

の性格の概説書は、性格の8つの基本的な観点を紹介して、その観点の違いにより性格のとらえ方が異なることを示しているが、確かに、その中の精神分析的観点をとると、無意識の強調という点だけで性格の研究内容が大きく規定されることが考えられる。

このような定義の側面を考慮して、わが国におけるここ1年の研究をみると、ほとんどが特性論的な観点からの研究であり、個々の発表は、性格のほんの一側面に焦点をあて、性格のとらえ方や定義にはふれず、性格研究の立場も明らかではない。また、研究対象が性格なのか、それとも感情、認知、行動なのか、また持続的な特性なのか一過性の特徴なのか明らかになっておらず、無意識に波及するものか、生物学的な基盤はどう考えるのかなど、定義側面から回答を求めたいものが多い。さらには、多くの研究が対象特性の定義さえ曖昧なままにしていることも事実である。しかし、現状では、ほとんどの研究がこのような問いに回答を用意しなくても成り立つのであり、このことが意味することの問題性を考える必要がある。

この問題について、健康に影響を及ぼす性格の研究に目を転ずると、概念の取り扱いの甘さが、研究上の混乱をもたらしている。たとえば、その最たる例を、タイプA性格・行動の研究に見ることができる。タイプAの研究が、健康に影響を及ぼす性格や行動の研究を科学の舞台に押し上げた功績は誰もが認めるところであるが、その概念の複雑さと定義の曖昧さは、研究がピークを越えた頃から研究結果の不一致を生み始め、研究上の多くの混乱をもたらした。Maddi (1990) は、このタイプAに対して、「……性格について理論化することはずっと避けられてきた。おそらくそれは、タイプAが強調され始めた頃は、性格という概念そのものが心理学の分野で強い攻撃にさらされていたからであろう。しかし、このことが心理学については門外漢の内科医たちにタイプAの研究を進めさせる一因となった」、「……より科学的であろうとするために（目に見えるものしか重視しないことによって）、底流にあるプロセスの理論化が妨げられてきたという事実は、科学がいかに間違った方向に導いてきたかを示している」（岡部訳、いずれもp.190）という厳しい批判をしている。Eysenck (1986) も同様の批判をしているが、ひとつの性格特性の概念を曖昧にしたまま研究が進み、研究者がそれぞれ違った定義をもって研究が進められたことから混乱をもたらした例である。タイプAの研究は、その後の、健康影響因としての性格研究の隆盛をもたらしたが、この研究領域も、現在に至り、タイプAと同様に概念の曖昧さからくる研究上の混乱を招き始めている。たとえば、健康影響因としての性格には、数多くの性格

が取りあげられ、それぞれ独立した研究として行われているが、自律性、コヒーレンス、ハーディネス、セルフ・エスティームなどをみても、相互に概念が重なりあい、概念のネーミングのみが1人歩きをし、同様の結果が同質の性格によってもたらされているという印象をもたざるを得ない状況が少なからずあり、概念の弁別上の混乱が指摘され始めている。

最近の、こうした健康影響因としての性格概念の乱立のなか、相互の重複を避け、まとまりを探る試みが始まっているが（Friedman & Booth-Kewley, 1987; Friedman, Tucker & Reise, 1995; Sheier & Bridges, 1995）、このような試みは研究の比較的初期の段階から考慮される必要がある。上に挙げた研究領域の例は、性格研究では、概念の取り扱いの問題をおろそかにすると、研究がやがて袋小路に入ることを示唆している。1本の研究の遂行ではみえない問題が、研究結果を集約したり、そこから共通事実や法則を見いだそうとする段階に出現するという、この研究領域におきまりの過ちが指摘され、注意を要する。

また、性格の位層的なとらえ方は一般的に理解しやすいものであるが、下位の位層ほど具体的な行動、感情、認知が強調され、性格という概念がもつ総合性という観点から外れていく。山崎・坂井・曾我・大芦・島井・大竹 (2001) は、性格と行動、感情、認知の位層的な見解を新たに提起して、性格という概念の1つのとらえ方を提唱している。しかし、そこでは、性格と行動、感情、認知の線引きは明確ではなく、研究者の立場によって異なることも同時に示唆している。たとえば、実際に臨床活動にたずさわる者にとっては、仮説構成体としての静的で安定した性格のとらえ方から得るものは少なく、個々の状況に応じて変化する、機能的な性格のとらえ方の利点を強調することになるだろう。これに対して、山崎 (2000) は、性格改善の予防プログラムを学校のクラス集団を対象にして実施する場合、仮説構成体としての安定した性格把握、行動、認知、感情を総合的に表現できるような性格把握を利用して、プログラムの具体的教育方法から最終教育目標への階層的な構成を整然と設定し、このレベルの性格のとらえ方の長所を指摘している。このような、性格のとらえ方の様々な立場は古くから論争されており、特性論的な見解への批判から一貫性論争（人・状況論争）が生まれ、新たに新相互作用論、社会的構築主義などの性格の把握方法が提起されてきた（岩熊, 2000 参照）。しかし、上に挙げた例は、1つの見解が正しいというのではなく、性格のとらえ方は、応用的研究に照らしてみたい場合、その把握方法は多様であってよいわけで、1つの限定した性格定義がすべてにわたって適用されることが現実的でないことをも意味している。しかし、こ

の柔軟な性格把握は、研究にかかわる性格の概念を曖昧にすることを容認するのではなく、柔軟であるからこそ、それぞれの立場を明確にしながら、概念のとらえ方とその内容を厳密に行うことの必要性を強調している。

さて、上記に性格概念の問題について言及してきたが、性格の把握のあり方に関する、わが国のここ1年の研究では、岩熊(2000)の研究が挙げられる。この研究では、過去の性格概念のとらえ方の変遷や論争を紹介した後、実在的特性の概念上の問題を指摘し、日常的な特性判断を、言語文化的特性と関係性としての特性が複合したものにとらえ、ここから認知主体の認知活動、つまりある者の特性は他者がそれをどう認知するかという点からとらえることの必要を強調している。性格特性を他者の認知過程の所産とすると、認知された特性として直接的に把握可能となり、性格研究の新たな方向性が現れてくることも示唆している。このような観点から性格をとらえた実証的な研究がすでに展開され(たとえば、Albright, Kenny & Malloy, 1988), 岩熊(1999)でも7名の大学生に精神式パーソナリティ・インベントリィを用いて、自己による評定と他の6名についての他者評定を実施し、相互の作用を検討している。岩熊らの指摘する性格把握では、これまでに性格研究で採用されてきた性格把握とはことなり、社会生活場面に即し、対人交互作用の観点を強調した性格把握が行われ、新たな性格研究の展開を期待させる。しかしながら、他者の視点からの性格把握方法が適用される研究領域は限定され、これまでの性格研究が対象とした領域にはほとんど適用できないことが容易に予想される。この点では、上記に指摘したように、研究内容により性格の把握のしかたが様々であってよい、様々であるべきである、という見解がここにも適用される。

こうして性格の概念の取り扱いについて言及してきたのであるが、研究対象となる性格概念が決定されても、その測定方法の精度が低いと概念把握の問題が測定の時点で再発する。測定方法については質問紙が利用されることが多いのであるが、質問紙の構成や内容については問題が多く、この点については本論文の後半でまとめて言及したい。

3 測定方法で特記すべき研究

3.1 ビッグファイブ尺度

欧米における、性格が主要5因子(ビッグファイブ)で大きくまとめられるという知見やその質問紙測定法の作成を受けて、わが国でも1990年代に入り、この測定方法である質問紙が盛んに作成され始めた。その中で、最近村上・村上(2001)がこれまでの研究をまとめ、村上らの主

要5因子性格検査の全貌を書籍として発表している。この書籍では、わが国におけるこれまでのビッグファイブ質問紙の問題点を指摘し、村上らの質問紙が、指摘したような問題点を持たない出来映えになっていることを強調している。

村上らの尺度は、その標準化のプロセスにおいて、わが国でこれまでに開発された質問紙にはない周到さがある。すなわち、サンプリングを特定の地域の大学生に限定せず、日本人全体からランダム・サンプリングを行い、青年期から成人後期までの世代別に標準化する手続きをとっている。この手続きの必要性はどの研究者も認識していることであるが、実際に実行した例はきわめて少なく、わが国のビッグファイブの質問紙では他に例がない。また、妥当性についても、規準関連妥当性として、Goldberg(1992)のSD尺度について自己評定と仲間評定を実施し、ビッグファイブ尺度との相関をみている。また、併存的妥当性も実施していて、併存的に採用する尺度が併存的妥当性を検討するための条件を満たすかどうかを慎重に検討し、多くの尺度を排斥した結果MINI性格検査とGHQを用いてこの妥当性の検討を行っている。質問紙の作成においては信頼性の検討が実施されないことはないが、妥当性の検討が十分に実施されないことは多い。しかし、質問紙のもっとも重要な特徴は妥当性であり、この妥当性がなければ信頼性がいくら高くともその尺度は使用できない。この点、村上の尺度は、妥当性の検討をもっとも丁寧に実施した研究の1つといえる。しかし、妥当性の検討に際しては、最初のサンプリング手続きの周到さは影を潜め、かなり限定された被検者が対象になっている。これは、上記のサンプリングのあるべき姿からすれば明らかに後退していると言わざるを得ないが、このあたりが実際の質問紙作成の限界と言えるかもしれない。この点については、この尺度の再検査信頼性の検討においても同様に指摘される。

また、村上らの尺度は、受検態度を測定するために頻度(F)と建前(Att)尺度を導入し、また不応答(?)の多さから受検態度を解釈することも考慮され、精度の高い結果を得るために細心の注意が払われている。わが国で作成される質問紙の多くにこの種の尺度が挿入されていないだけに、村上の尺度の価値が強調される。

このように、村上らによって精度の高いビッグファイブ尺度が作成された今、この領域の次の課題を考えてみたい。課題としてまず挙げられることは、青年期前の尺度を作成することであろう。性格研究では、発達ならびに教育的な研究は中心的な研究領域となるので、広い発達段階を調べる尺度が必要となる。この点では、曾我(1999)が小学生用を作成しているが、さらに中学生用の完

成も待たれるし、各発達段階の尺度の対応性も検討する必要がある。次に、応用的研究領域を見据えた研究領域、たとえば健康とビッグファイブの関連をみる場合、ビッグファイブは性格の記述を目指すのであり、性格が健康とどのように関係しているのかを説明するのにどれほどの貢献があるか疑問であるという指摘もある (Smith & Williams, 1992)。確かに、Friedman, Tucker & Reise (1995) の研究でも健康関連性格とビッグファイブとの関係を調べているが、これまでに指摘されてきた健康関連性格がビッグファイブに包括される結果ではなかった。この点では、性格に認知、感情、行動面の要素が増してくると、ビッグファイブでは扱えきれない可能性が指摘される。つまり、ビッグファイブ自体は大きすぎて、個々人の特徴をとらえる特定性にかける。この問題については、ビッグファイブの下位構成要素 (側面因子) を測定できる尺度も出てきているようで、村上らの尺度では、普遍性が確認されていないということで考慮されなかったが、5因子の下位構成因子の存在の探索とそれを測定できる尺度の作成が待たれる。

3.2 健康関連性格を測定する簡易対人関係反応尺度 (SIRI)

タイプA性格・行動の研究を契機として、健康に影響を及ぼす性格や行動が盛んに研究されはじめたことは先述した。しかし、最近に至り、そこで扱われる概念の重複と関連する疾患の独立性と統合性が問題にされ始めている。つまり、それぞれ、別の名前で扱われている健康関連性格間に共通性があること、そして、1つの性格あるいは複数の性格が1つの特定の疾患、複数の特定疾患、全般的に病気になりやすい傾向とどのように関連しているのかという問題である。この問題の解決への模索は多方面から実施されている。それは、因子分析を駆使して健康関連性格のまとまりを探る試み (Friedman, Tucker & Reise, 1995)、代表的な複数の性格と複数の疾患の関係についての過去の研究を対象としたメタ分析 (Friedman & Booth-Kewley, 1987)、代表的な複数の性格と疾患との関係のレビューによる考察 (Scheier & Bridges, 1995)、そして、健康との関連を包括するような類型的研究であった (Friedman, 1993; Grossarth-Maticek, Eysenck & Vetter, 1988)。その中で、自律性を核としたタイプ1からタイプ6までの性格類型を扱った研究では、ガンや冠状動脈性心臓疾患などの代表的な疾患と性格との関連を疫学的に証明している (Eysenck, 1987)。

この性格類型に関する、Grossarth-Maticek らの質問紙がいくつか作成され、わが国でも日本成人用の標準化が試みられているが、質問紙項目の質問文が難解なこと

もあって、その標準化が難航していた (山岡・林・林, 1994)。このような中で、Grossarth-Maticek & Eysenck (1990) が開発した簡易対人関係反応尺度 (Short Interpersonal Reactions Inventory: SIRI) が比較的理解しやすい項目内容であることから、その日本語版作成の試みがなされ始めた (熊野・織井・鈴嶋・山内・宗像・吉永・瀬戸・坂野・上里・久保, 1999; 熊野・織井・山内・瀬戸・上里・坂野・宗像・吉永・佐々木・久保, 2000; 永野・須藤・久保・古野, 2001)。そのうち、熊野ら (2000) では、熊野ら (1999) の尺度にタイプ5と6の項目を追加し、SIRIの全70項目で1,000名を超える一般健康成人を対象に標準化の試みを行っている。その結果、タイプ1～6に対応する項目が33項目抽出されている。この日本語版では、内的整合性が低いタイプがあることや、妥当性の検討が不十分であることが指摘されるが、今後の研究の使用に耐え得る出来映えであると判断される。また、永野ら (2001) もほぼ同時期に独立して SIRI 日本語版の作成と標準化を実施しているが、熊野らの尺度と比べて、因子的妥当性がないことや、妥当性の検討の不十分さがより大きいことが指摘される。因子分析の結果から項目を削除する方針の有無やその内容が両者の最終結果を異なるものとした可能性が大きい、尺度作成への方針や回答者集団の違いなど細部の方法を含めて比較検討する余地が多い。また、Grossarth-Maticek らの尺度を忠実に反映したものではないが、永野・須藤 (2001) は、Grossarth-Maticek らのパーソナリティ理論や尺度を参照して、疾病親和的パーソナリティ特性を評価するストレス調査票の作成にも乗り出していることが付記される。しかし、こうした尺度作成の現況をみると、山岡ら (1995) が標準化の先鞭をつけた Grossarth-Maticek らの尺度が、ここへ来てようやくわが国の研究に利用できるものになりつつあるといえる。

Grossarth-Maticek らの尺度は、近年の成人が罹患しやすく、その影響度が大きい疾患 (ガンや冠状動脈性心臓疾患など) を性格の面から総合的にとらえることを可能にするという点で、その意義と利用価値が高い尺度となることが予想される。また、Grossarth-Maticek らは自らのパーソナリティ理論をもとに、自律性トレーニング (autonomy training; Grossarth-Maticek & Eysenck, 1991) を開発し、これは彼らの言う健康的な性格タイプであるタイプ4への変容を行う一種の認知行動療法であるが、永野らが尺度作成の試みの他にこのトレーニング技法の日本版を作成し、実際の患者への適用を試みている (永野・田中・須藤・久保, 2000)。この適用によって、疾患親和性のある性格タイプの同定から適応への治療的あるいは予防的試みの導入が可能となり、検査の本来の目的である健康への寄与を実現できる方法が用意されることになる。

4 特記すべき研究内容

4.1 健康領域の充実

わが国における性格研究領域の最近の研究内容としてまず特記されることは、健康と関連する研究の充実であろう。そこには、ビッグファイブ関連で、ハーディネスとストレス反応を測定した研究(多田・濱野, PB32)、長寿地域高齢者を対象とした研究(鈴木・崎原・秋坂・柏木・芳賀・齋・當銘・林, 2000)、そして特性的(一般的)自己効力感の関連では、精神的健康(GHQ)(三好, PE32)、対人不安と公的自己意識の関係(亀田, PE28)の研究がある。他には、怒り表出傾向、主張性とストレス反応の関係(田中, PA34)、健康の統制の位置とソーシャルサポートが心身の健康(東大式健康調査)に及ぼす影響(三林, 2000)、アレキシサイミアにおける循環器系反応などの精神生理学的反応性(馬場・佐藤, 2001)など多彩な研究が展開されている。これらの研究の健康側の変数をみると、ストレス尺度、GHQ、対人不安尺度などとなっており、ストレス尺度やGHQが多用されている状況はこれまでと変わらない。

上記の研究の方法は、ほとんどが調査研究で、大学生に複数の質問紙が同時に実施されている。このように、性格の研究領域では、複数の質問紙が同時に実施される場合が少なくないが、各質問紙の概念上の重複や質問紙の実施順序のカウンターバランスの欠如など、研究目的の構築や方法論上に重大な問題をもつ研究も散見される。特に質問紙間の概念上の重複は研究の意味そのものを疑問視する問題であり、この点は、健康領域に限らず、性格研究全般の問題になっている。またこの領域では、調査ではなく、実験を主としている研究が少なくなったが、馬場・佐藤(2001)の研究は、アレキシサイミア傾向の高低群を質問紙により設定して、各群に実験を施し、精神生理学的反応性を調べている。そこでは、アレキシサイミア傾向の皺眉筋活動の反応性が低いことが明らかにされ、アレキシサイミアの特徴を実際の行動変化で示した点で貴重なデータとなっている。また、鈴木ら(2000)においては、沖縄県と他府県の65歳以上の高齢者を対象に、性格5因子(ビッグファイブ)が比較され、その群の構成において興味深い研究であり、ビッグファイブの測定法の信頼性と妥当性に不十分なところが指摘されるものの、長寿傾向という側面から健康の性格要因を探った研究としては意義深い。

また、調査研究の醍醐味は、積極的に因果モデルを設定し、その検証を行うことであろうが、相関分析に終始している研究が多いことにはものたりなさを感じる。ここ1年の健康と性格の関連に関する研究では、他者の判断や意見に流されやすい「流されやすさ」傾向と対人不安

との関連をみた向井(PE30)の研究が、共分散構造分析を用いて因果モデルを検証しているばかりであった。この領域の研究が、健康の増進に寄与するという最終目的をもつと考えると、単なる関係の有無よりも健康との因果関係が明確な変数の存在を積極的に探ることの重要性が強調される。

4.2 自己概念

性格との関連の程度は不明であり、研究者もその点には言及していないが、本論文で参照する本年度(平成13年度)の教育心理学会大会論文集の人格部門で発表されたということでは、自己概念関係の研究が目立つので紹介したい。その1つに、自我同一性の研究があり、Erikson(1950)からはじまる研究が今日に至るまでわが国においても続いているようである。そこではまず、自我同一性を構成する側面のまとまり(構造)に関する研究(谷, PC34)があり、谷のいう自我同一性概念の構成要素のうち、自己斉一性・連続性と対他的同一性がひとつのまとまり(中核的同一性)、対自的同一性と心理社会的同一性が今ひとつのまとまり(心理社会的自己同一性)をなすことを構造方程式モデリングを用いて明らかにしている。次に、自我同一性パターンごとの時間的信念の特徴を比較した研究(水野, PB28)があり、自我同一性の形成特徴と時間に対する個人の価値づけの関連を示し、また、自我同一性地位とEriksonの発達課題の解決の程度との関連の研究(武蔵・河村, PE29)では、青年期の発達課題である自我同一性の確立には、それ以前の発達課題の獲得が影響を与えていることが示された。

自己概念に関する2つめの研究は、理想自己に関するもので、まず小平(PD36)が、理想自己と義務自己に関連づけられたエピソードを比較し、理想自己が肯定的、義務自己が否定的なエピソードと関連づけられやすい傾向を明らかにしている。また、水間・伊藤・橋本(PA36)は、理想自己の性質(重要性、目標性、実現可能性)と自己形成意識の因果関係を分析し、若原(PA38)は、自我理想の形成プロセスにおける、人物モデルへの理想視からの影響について実証的研究を行っている。そして3つめには、自己愛の研究があり、松並・中村(PD34)が自己愛と対人関係(友人との関係、他者からの評価、恋人の選択基準)を検討し、中村・松並(PD33)は、発達の観点から自己愛の各側面と親の養育態度の関係を調べている。

この他にも、自己概念にかかわる研究は多く、老年期の自己受容(高井, PC30)、自己存在感と攻撃性の関係(湯川・三崎, PC32)、さらに発達関係では、小学生を対象にして自己概念の多様な側面が調べられている(李, PE31)。また、上記の健康領域で紹介してもよい研究も確認され、

外山・桜井(2000)は、自己認知をポジティブ・イリュージョンとネガティブ・イリュージョンからとらえ、抑うつ傾向との関係を調べ、金子(2000)は、一般青年に見られる被害妄想的な思考を自己関係づけとしてとらえ、高校生と大学生においていくつかの性格特徴と自己関係づけの関係を比較している。

4.3 自己効力感

次に目立った研究は、自己効力感に関する研究であり、自己効力感は上記の自己概念のあり方とも強く関連している。とくにその研究は、状況的な自己効力感ではなく、性格概念に近い自己効力感に関するものであり、そのため、特性的自己効力感ともよばれている。行動、感情、認知の諸特徴の背景には、それをもたらす性格概念を想定できる場合も多く、性格であるかないかの線引きのむずかしさとその線引きにまつわる研究の立場の相違は山崎ら(2001)に考察されているので参照されたい。ここでの研究では、まず、この特性に関する尺度作成の研究があり、松島・塩見(PB34)は、友人関係に焦点をあてた対人的自己効力感尺度の信頼性と妥当性を検討して、自己効力感を特定領域で測定し、それぞれの領域ごとに研究を進める方向が加速されている。また、対象者の集団別の比較もなされていて、鈴木・Kim・松田・石田(PG29)、Kim・鈴木・松田・石田(PG30)では、日本、韓国、中国、英国、米国の5カ国で、現職教員を対象に、教師としての自己効力感を調べ、その因子ごとの分析の結果、国によりその高低が異なることを明らかにしている。この研究でも、自己効力感を教員に限定して、しかも国別に比較され、自己効力感の研究の新たな展開がなされている。

これに対して、全般的な特性的自己効力感についての研究も行われており、三宅(2000)は、この自己効力感とネガティブな出来事に対する原因帰属や対処行動の関係を大学生で調べた結果、男女差を確認し、男性においては、効力感高群は低群よりも内的で統制可能な要因に原因を帰属する傾向がみられ、女性においては、高群は低群に比べて内的な要因には帰属しない傾向を見いだしている。さらに、男女とも高群の方が、次に与えられる課題に固有の自己効力感や積極的な対処行動の評定が高いことも明らかにしている。全般的な特性的自己効力感についての研究の歴史は浅く、上記の特定領域への研究の発展とともに、他変数との関連やその因果特徴について検討すべき課題は少なくない。

4.4 共感性

共感性の研究の歴史は古いが、ここ1年の研究をみて

も雑誌論文での発表が目立つ。そこには最近の傾向というものを抽出することはできないが、発達や非行の領域における研究が継続して行われている。発達では、石川・内山(2001)が5歳児を対象にして、罪悪感に影響する要因として共感性と役割取得能力を面接法を用いて調べている。その結果、共感性は、規則場面での罪悪感ではなく、対人場面での罪悪感に影響し、罪悪感への影響に場面の違いを考慮することの重要性を示唆している。また、非行少年の共感性については、出口・大川(2000)が非行種別と道徳判断との関係を調べているが、非行経験や年齢によって共感性の高さが異なることや、道徳判断との関係では一般共感との正の関係がある程度確認されるが、共感性の側面や犯罪種別、性別によっては、両者の関係が異なり、共感性が一概に高ければよいということではなく、この概念に含まれる側面を考慮することの必要性が示唆されている。これらの研究は、共感を構成する要素の強調や、条件の異なりがその機能の違いをもたらすことを示しているが、とくに共感性の構成要素の問題は、研究の当初から強調されていることである。

共感性の構成要素についての強調では、橋本・塩見(PC36)の共感性尺度でも、共有不全経験因子、否定感情共有経験因子、肯定感情共有経験因子の3因子を抽出している。共感性には、大きく認知的側面と情動的側面があるが、わが国では、認知的側面をとらえるDavis(1983)の対人反応性指標(Interpersonal Reactivity Index; IRI)が取りあげられることが多く(三原, 1998; 桜井, 1988)、登張(2000)のレビュー・展望論文でも、このIRIを構成する共感性の4側面(共感的関心、個人的苦痛、視点取得、ファンタジー)について、向社会的行動、情動性、対人認知などの特徴との関連をまとめ、各次元の意味の推測を深めている。共感性を構成する次元については、登張が指摘するように、検討の余地が多く、研究者間で一致をみるような次元構成の構築が待たれ、現状のように、多様な次元構成でそれぞれの研究者が独自に研究を進めている状況は研究の混乱を招きかねない。

5 研究上の問題点

性格は構成概念であり、構成概念の測定は困難な問題を数多く孕んでいる。また、その測定法では、質問紙法が用いられることが多く、使用される質問紙の標準化の問題が指摘される場合が多い。標準化のうち、信頼性の検討では、 α 係数を算出し、再検査法を行うという常套的な手段、古典的テスト理論による手続きが用いられることが多い。しかし、尺度を構成する項目の類似性がきわめて高く、 α 係数の高低が無意味な研究や、 α 係数が低いまま信頼性を保証するという結論に達する研究も少

なくない。また、再検査法の期間もまちまちで、性格という比較的安定した特性の測定にしては短かすぎる期間が設定されている研究が目立つ。また、質問紙の適用条件も明確でないことが多く、たとえば、記名の有無や一斉実施集団の大きさなどに始まり、妥当性などのために複数の質問紙を実施する場合の実施順序などの不明である。標準化の研究は一度実施されれば、その結果を引用して多くの研究者がその尺度を使用することになるので、これらの詳細を明記したい。

次に妥当性の問題であるが、妥当性の十分な検討はきわめてむずかしい。しかし、妥当性がなければ、信頼性が高くても尺度を使用することはできないので、避けては通れない確認事となっている。この妥当性では、併存的妥当性を検討するケースが多いが、併存対象となる尺度自体の妥当性が未知であるケースが多く、妥当性の検討にならないケースが多い。そこで、他の規準を採用した方法が考えられるが、最近では、仲間評定や指名法が用いられる例も多く報告されるようになってきた（たとえば、安藤・曾我・山崎・島井・島田・宇津木・大芦・坂井, 1999; Buss & Perry, 1992）。この方法は、構成概念的妥当性の検討とも関連するが、他者からの何らかの評価を妥当性の規準とする方法である。この方法は長所と短所を同時に兼ね揃えているが、妥当性の1つの資料としては有用であり、今後の研究では積極的に採用してよい方法と考えられる。この他、予測的妥当性にしても、構成概念的妥当性にしても、ある性格特性がもたらす結果が研究間で不一致であるケースが多く、採用する対象が定まりにくいのが現状である。

また最後に、尺度が適用可能な集団について注意が喚起される。先述したが、大学生集団を対象に標準化された尺度を一般社会人に適用することには無理がある。標準化対象と尺度適用可能集団の一致性をどこまで厳密にすべきかは一概には言えないが、両者の不一致があまりにも大きい尺度適用が目立つ。標準化は、確かに程度の問題である。ある程度の標準化の達成が行われれば、それで実際の研究に使用することはやむを得ないであろう。しかし、その標準化の程度を示す情報は詳細に流すべきである。それによって、尺度の利用者は、使用する尺度の問題性と限界を知った上での利用が可能となるのである。

次に、研究上の問題点というわけではないが、性格研究で実験的な研究が減っている現状を指摘したい。確かに、性格で実験的な研究をする場合、大きな集団から当該の性格について特定の対象者を選択し、高低群等を設定して実験室事態での操作を行う、という点において、煩雑な手続きを経ることになる。この点が敬遠されるこ

とが1つの理由であろうが、他にも調査研究の分析手法の向上の理由が挙げられる。共分散構造分析などはその最たるもので、単なる相関ではなく、因果のモデルがその適合性とともに行なえる手法は研究者には魅力である。これに対して、実験における条件統制の手法が、ある変数から別の変数への影響を純粹に（偏りなく）調べることができる長所をもつという指摘がある（大津, 1998; 椎名, 1998）。しかし、この指摘に対して豊田（1998a, b）は、心理・社会系の実験では、統制要因として採用されなかった要因が数多くあり、実験的方法のみで因果関係を導くことはむずかしいと指摘している。また同時に豊田は、共分散構造分析を利用する研究でも、仮説の構築や、調査票の作成には多大な労力が必要であることも指摘している。共分散構造分析にかけるとは、その前の仮説の構築や分析にかけるとデータの採取方法が重要であり、この点において不十分な研究の横行をみると、実験における変数の統制の困難さと同様の困難さあるいは問題性をみることができる。性格研究でも、生理心理学の一部の領域のように、実験研究でなくては成立しがたい研究領域もあり、実験研究の必要性が見いだされれば、積極的に実施されることが望ましい。

この領域の研究上の問題点として最後に指摘したいのは、複数の質問紙を実施した場合の概念の重複性の問題である。この点はこれまでも少し指摘したが、研究の根本的な意義を問う問題でもあるので再度強調したい。たとえば、攻撃性とストレス反応の関係を例にとると、ストレス反応自体に怒りなどの特徴が含まれ、攻撃性とストレスの関係が正になることが自明な状態で研究が行われる場合のことである。他にも、特性的コーピングとストレス反応、敵意性と原因帰属、特性的自己効力感と抑うつなどに、一部概念上の重複例をみることができる。一般に2つの特徴の関連を見る場合は、1つが調査データ、今1つが実験データによる、というように、両者のデータが異質な収集方法であると関連が見いだされることが少なく、どちらも調査データになると関連が見いだされやすいという印象を受ける。そこでは、同時に行う調査間で相互に影響が出たり、概念上の重複が影響していることが推測される。また、概念の重複は、その名前や定義のレベルで考えるだけではなく、質問紙を構成している項目レベルまで落として検討すべきであり、項目同士の比較でその類似性が確認される場合も少なくない。

6 今後の展望

最後に、この研究領域における今後の展望についてふれてみたい。性格研究では、それぞれの領域で今後の展望が開けているのであろうが、ここでは、性格研究にお

ける新たな研究領域ということで、研究の質としてはまったく異なる2つの研究領域の必要性を強調するにとどめたい。

その1つは、性格に関する遺伝関係の研究である。安藤(2000)は、双生児研究を中心とした内外の人間行動遺伝学の研究を一般に紹介している。ここには、近年の、人間の心や行動の遺伝性についての研究方法や知見がわかりやすく紹介されている。かつての性格や行動の遺伝性研究は、同環境と異環境生育の双生児を比較した上で遺伝性の存在の有無を指摘することを中心とした、素朴な研究方法に終始していた。しかし、近年は、相加的遺伝要因を想定した場合には、Falconer(1981)等の公式を、非相加的遺伝要因が想定される場合は、構造方程式モデリングを用いて、遺伝要因の寄与率を数値として算出することができるようになってきている(安藤, 1999, 2000)。そして、人間行動遺伝学の研究では、本稿の研究対象である性格領域にまで遺伝の寄与率が算出され、外向性、神経質、宗教性などの性格特徴がその対象になっている。今後、当該の性格の定義や測定法の問題に注意を払いながら、性格の遺伝性の問題が明らかになれば、その形成過程や教育の問題にも有益な情報を提供できよう。

この性格の遺伝性研究を、さらに遺伝子の同定にまで広げた研究が最近目立ちはじめている。Ebstein(1996)やBenjamin(1996)の新規性希求傾向とDRD4遺伝子多型の関係についての初期の研究は有名であるが、その後もその関係を追試発展させる研究が続いている(e.g., Ronai, Szekely, Nemodai, Lakatos, Gervai, Staub & Sasvari-Szekely, 2000)。性格特徴では他にも、不安関連性格とセロトニン伝達遺伝子多型の関係(Melke, Landén, Baghei, Rosmond, Holm, Björntorp, Westberg, Hellstrand & Eriksson, 2001)、攻撃や衝動性とモノアミンオキシダーゼA遺伝子多型の関係(Manuck, Flory, Ferrell, Mann & Muldoon, 2000)など多くの研究がなされている。もっとも、これまでの研究を否定するような研究がないわけではないが(e.g., Persson, Wasserman, Geijer, Frisch, Rockah, Michaëlovski, Apter, Weizman, Jönsson & Bergman, 2000)、はやくも多数の遺伝子を総合的に分析し、性格に影響する遺伝子のまとまりを調べる研究も出始め(Comings, Gade-Andavolu, Gonzalez, Wu, Muhleman, Blake, Mann, Dietz, Saucier & MacMurray, 2000)、遺伝子レベルまで掘り下げた性格の研究が今後さらに発展することが予想され、また期待もされる。

上記の遺伝性に関する生物学的な研究に対して、今1つの研究展望として取りあげたいのが性格を中心とした心的特性(性格、認知、行動、感情)に関する教育的介入の試

みである。多くの健康問題や適応上の問題は、もとをたどれば、個人の性格にその原因の多くを帰することができると考えられる。たとえば、健康問題として近年ますますその重大性が高まっている生活習慣病の代表格であるガンや冠状動脈性心臓疾患を取りあげても、その病気に特有の生活習慣やストレスの規定因として、ガンの場合には自律性や感情表出の乏しいガン性格(e.g., Grossarth-Maticek, Siegrist & Vetter, 1982; Temoshok, Heller & Sagebiel, 1985)、冠状動脈性心臓疾患の場合は、敵意を中心とした攻撃性(e.g., Barefoot, Dahlstrom & Williams, 1983; Shekelle, Gale, Ostfeld & Paul, 1983)などがおおとの疾患原因の1つとして指摘されている。こうした心的特性に対して、教育現場を中心に、予防的な教育を実施しようとする試みが内外で実施されている。性格はその形成の早期性から、できるだけ早い段階で介入することが推奨されるが、家庭を対象とした効果的で持続的な教育は難しく、最初の介入ということで、学校関連の場の利用可能性が高い。

この種の教育に関しては、わが国では、攻撃性の適正化(山崎, 2000)、依存・消極性の改善(今村, 1999; 山崎, 2001)など、小学校において性格の適応化をはかるために、その構成要素である認知、感情、行動を教育対象とした予防的介入が最近実施され始めている。また海外でも同様の教育的介入が、問題性が確認されたり、予測されたりする子どもたちを集めた小集団での教育が多いものの、認知的な改善(e.g., BrainPower Program; Hudley, 1994)、ソーシャル・スキルの改善(e.g., Earls Court Social Skills Group Program; Pepler, King & Byrd, 1991)、身体ならびに情動的弛緩(e.g., Fortman & Feldman, 1994)などを中心として実施されている。そして最近では、1つの心的側面というより、認知面、スキル面、身体・情動面などを総合的にとらえ、多面的な目標をもったプログラムが作成される傾向が強く、攻撃性を教育介入対象とした攻撃置換訓練(Aggression Replacement Training; Goldstein, Glick & Gibbs, 1998)などはその最たる例と考えられる。このような教育は、性格を教育対象として意識したものばかりではないが、認知、感情、行動のいずれかにはかかわっており、その変容は最終的に性格変容にまでつながることが多く、性格変容に至れば、その影響下にある認知、感情、行動の変容が安定して達成されたことを意味し、健康や適応への好影響は大きい。

こうして、今後の展望として生物学的な側面と教育的な側面を指摘したが、性格研究は、この両方向への発展が研究領域の今後の発展を担う可能性が大きい。また、教育を含めた応用的な研究に照らして基礎研究の意味を問う姿勢を今後は欠かすことができず、このことは、や

やもすると研究の意味を失いがちな、この研究領域への最良の指針となろう。

引用文献

- Albright, L., Kenny, D. A., & Malloy, T. E. 1988 Consensus in personality judgments at zero acquaintance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 387-395.
- Allport, G. W. 1961 *Pattern and growth in personality*. New York : Holt.
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 1999 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- 安藤寿康 1999 遺伝と教育 一人間行動遺伝学のアプローチ 風間書房
- 安藤寿康 2000 心はどのように遺伝するか 講談社
- 馬場天信・佐藤 豪 2001 アレキシサイミアの内的感情体験想起に伴う精神生理学的反応性の検討 心身医学, 41, 265-272.
- Barefoot, J. C., Dahlstrom, W. G., & Williams, R. B., Jr. 1983 Hostility, CHD incidence, and total mortality : A 25-year follow-up study of 255 physicians. *Psychosomatic Medicine*, 45, 59-63.
- Benjamin, J., Li, L., Patterson, C., Greenberg, B. D., Murphy, D. L., & Hamer, D. H. 1996 Population and familial association between the D4 dopamine receptor gene and measures of novelty seeking. *Nature Genetics*, 12, 81-84.
- Buss, A. H., & Perry, M. 1992 The aggression questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 452-459.
- Comings, D. E., Gade-Andavolu, R., Gonzalez, N., Wu, S., Muhleman, D., Blake, H., Mann, M. B., Dietz, G., Saucier, G., & MacMurray, J. P. 2000 A multivariate analysis of 59 candidate genes in personality traits: The temperament and character inventory. *Clinical Genetics*, 58, 375-385.
- Davis, M. H. 1983 Measuring individual differences in empathy : Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- 出口保行・大川 力 2000 非行少年の共感性に関する研究 一非行種別, 道徳判断との関連を中心として一 犯罪心理学研究, 38, 17-36.
- Ebstein, R. P., Novick, O., Umansky, R., Priel, B., Osher, Y., Blaine, D., Bennett, E. R., Nemanov, L., Katz, M., & Belmaker, R. H. 1996 Dopamine D4 receptor (D4DR) exon III polymorphism associated with the human personality trait of novelty seeking. *Nature Genetics*, 12, 78-80.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: Norton.
- Eysenck, H. J. 1986 Smoking and health. In R. D. Tollison (Ed.), *Smoking and society : Toward a more balanced assessment*. Lexington : Lexington Books. Pp.17-88.
- Falconer, D. S. 1981 *Introduction to quantitative genetics*. 2nd ed. London: Longman.
- Fortman, J., & Feldman, M. 1994 Controlling impulsive expression of anger and aggression. In M. J. Furlong & D. C. Smith (Eds.), *Anger, hostility and aggression: Assessment, prevention and intervention strategies for youth*. Brandon : Clinical Psychology Publishing. Pp.473-507.
- Friedman, H. S., & Booth-Kewley, S. 1987 The "disease-prone personality": A meta-analytic view of the construct. *American Psychologist*, 42, 539-555.
- Friedman, H. S., & Schustack, M. W. 1999 *Personality : Classic theories and modern research*. Boston: Allyn and Bacon.
- Friedman, H. S., Tucker, J. S., & Reise, S. P. 1995 Personality dimensions and measures potentially relevant to health : A focus on hostility. *Annals of Behavioral Medicine*, 17, 245-253.
- Goldberg, L. 1992 The development of markers for the big-five factor structure. *Psychological Assessment*, 4, 26-42.
- Goldstein, A. P., Glick, B., & Gibbs, J. C. 1998 *Aggression replacement training : A comprehensive intervention for aggressive youth*. Champaign, Ill.: Research Press.
- Grossarth-Maticek, R., & Eysenck, H. J. 1990 Personality, stress and disease: Description and validation of a new inventory. *Psychological Reports*, 66, 355-373.
- Grossarth-Maticek, R., & Eysenck, H. J. 1991 Creative novaton behavior therapy as a prophylactic treatment for cancer and coronary heart disease: Part I -Description of treatment. *Behavior Research Therapy*, 29, 1-16.

- Grossarth-Maticek, R., Eysenck, H. J., & Vetter, H. 1988 Personaity type, smoking habit and their interaction as predictors of cancer and coronary heart disease. *Personality and Individual Differences*, **9**, 479-495.
- Grossarth-Maticek, R., Siegrist, J., & Vetter, H. 1982 Interpersonal repression as a predictor of cancer. *Social Science & Medicine*, **16**, 493-498.
- Hudley, C. A. 1994 The reduction of childhood aggression with the BrainPower program. In M. J. Furlong & D. C. Smith (Eds.), *Anger, hostility and aggression : Assessment, prevention and intervention strategies for youth*. Brandon : Clinical Psychology Publishing. Pp.313-344.
- 今村研詞 1999 学校における依存・消極的性格の改善教育—フィークス・プログラムの実践— 日本教育実践学会第2回大会発表論文集, 92-93.
- 石川隆行・内山伊知郎 2001 5歳児の罪悪感に共感性と役割取得能力が及ぼす影響について 教育心理学研究, **49**, 60-68.
- 岩熊史朗 1999 パーソナリティ認知に及ぼす認知対象者と認知主体の効果：小集団における相互評定の分析 社会心理学研究, **15**, 1-12.
- 岩熊史朗 2000 “特性”の心理学的構築 文化情報学, **7**, 1-14.
- 金子一史 2000 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究, **48**, 473-480.
- 熊野宏昭・織井優貴子・鈴鴨よしみ・山内祐一・宗像正徳・吉永 馨・瀬戸正弘・坂野雄二・上里一郎・久保木富房 1999 Short Interpersonal Reactions Inventory 日本語短縮版作成の試み—タイプCパーソナリティ測定を中心として— 心身医学, **39**, 335-341.
- 熊野宏昭・織井優貴子・山内祐一・瀬戸正弘・上里一郎・坂野雄二・宗像正徳・吉永 馨・佐々木直・久保木富房 2000 Short Interpersonal Reactions Inventory 日本語短縮版作成の試み（第2報）—33項目版への改訂— 心身医学, **40**, 447-454.
- Maddi, S. R. 1990 Issues and interventions in stress mastery. In H. S. Friedman (Ed.), *Personality and deisease*. New York : John Wiley & Sons. Pp. 121-154. 岡部憲二郎（訳）1997 ストレス克服の問題点と介入法 手嶋秀毅・宮田正和（監訳）性格と病氣 創元社 Pp.153-197.
- Manuck, S. B., Flory, J. D., Ferrell, R. E., Mann, J. J., & Muldoon, M. F. 2000 A regulatory polymorphism of the monoamine oxidase-A gene may be associated with variability in aggression, impulsivity, and central nervous system serotonergic responsivity. *Psychiatry Research*, **95**, 9-23.
- Melke, J., Landén, M., Baghei, F., Rosmond, R., Holm, G., Björntorp, P., Westberg, L., Hellstrand, M., & Eriksson, E. 2001 Serotonin transporter gene polymorphisms are associated with anxiety-related personality traits in women. *American Journal of Medical Genetics*, **105**, 458-463.
- 三原 亘 1998 共感性尺度の認知的側面に関する一研究 性格心理学研究, **6**, 152-153.
- 三林真弓 2000 心身の健康に及ぼす Health Locus of Control とソーシャルサポートの効果 性格心理学研究, **9**, 11-21.
- 村上宣寛・村上千恵子 2001 主要5因子性格検査ハンドブック 学芸図書
- 永野 純・須藤信行 2001 疾病親和的パーソナリティ特性評価のための自記式質問票開発の試み—質問項目の作成過程と内容妥当性について— 健康科学, **23**, 41-52.
- 永野 純・須藤信行・久保千春・古野純典 2001 日本語版 Short Interpersonal Reactions Inventory の心理測定的信頼性と妥当性 行動医学研究, **7**, 104-116.
- 永野 純・田中浩稔・須藤信行・久保千春 2000 日本人における自主性開発トレーニング Autonomy Training の効果—ジストニア患者に対する応用— 心身医学, **40**, 159-170.
- 大津起夫 1998 事後分析は難しい—SEM推定の問題点— 豊田秀樹（編）共分散構造分析[事例編] 北大路書房 Pp.182-185.
- Pepler, D. J., King, G., & Byrd, W. 1991 A social-cognitively based social skills training program for aggressive children. In D. J. Pepler & K. Rubin (Eds.), *The development and treatment of childhood aggression*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. Pp. 361-388.
- Persson, M. -L., Wasserman, D., Geijer, T., Frisch, A., Rockah, R., Michaelovski, E., Apter, A., Weizman, A., Jönsson, E. G., & Bergman, H. 2000 Dopamine D4 receptor gene polymorphism and personality traits in healthy volunteers. *European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience*, **250**, 203-206.
- Ronai, Z., Szekely, A., Nemoda, Z., Lakatos, K., Gervai, J., Staub, M., & Sasvari-Szekely, M. 2001 Association between Novelty Seeking and the -521 C/T polymorphism in the promoter region of the

- DRD4 gene. *Molecular Psychiatry*, **6**, 35-38.
- 桜井茂男 1988 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて— 奈良教育大学紀要 (人文・社会), **37**, 149-154.
- Scheier, M. F., & Bridges, M. W. 1995 Person variables and health: Personality predispositions and acute psychological states as shared determinants for disease. *Psychosomatic Medicine*, **57**, 255-268.
- Shekelle, R. B., Gale, M., Ostfeld, A. M., & Paul, O. 1983 Hostility, risk of coronary heart disease, and mortality. *Psychosomatic Medicine*, **45**, 109-114.
- 椎名乾平 1998 天を舞うものと地を這うもの 豊田秀樹 (編) 共分散構造分析 [事例編] 北大路書房 Pp. 186-189.
- Smith, T. W., & Williams, P. G. 1992 Personality and health: Advantages and limitations of the five-factor model. *Journal of Personality*, **60**, 395-423.
- 曾我祥子 1999 小学生用 5 因子性格検査 (FFPC) の標準化 心理学研究, **70**, 346-351.
- 鈴木征男・崎原盛造・秋坂真史・柏木繁男・芳賀 博・兪 今・當銘貴世美・林 聡子 2000 長寿地域高齢者の心理的特性—性格 5 因子モデルによる比較研究— 心身医学, **40**, 525-532.
- Temoshok, L., Heller, B. W., & Sagebiel, R. W. 1985 The relationship of psychosocial factors to prognostic indicators in cutaneous malignant melanoma. *Journal of Psychosomatic Research*, **29**, 135-153.
- 登張真稲 2000 多次元的視点に基づく共感性研究の展望 性格心理学研究, **9**, 36-51.
- 戸山美樹・桜井茂男 2000 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究, **48**, 454-461.
- 豊田秀樹 1998a 共分散構造分析 [入門編] 朝倉書店
- 豊田秀樹 1998b 大津コメントに関して 豊田秀樹 (編) 共分散構造分析 [事例編] 北大路書房 Pp. 200-202.
- 豊田秀樹 1998c 椎名コメントに関して 豊田秀樹 (編) 共分散構造分析 [事例編] 北大路書房 Pp. 202-203.
- 山岡和枝・林 文・林知己夫 1994 調査票の持つ構造を保持した簡易化の試み—Eysenck のパーソナリティテストの日本語訳簡略版の作成— 社会心理学研究, **10**, 123-133.
- 山崎勝之 (編) 2000 心の健康教育 星和書店
- 山崎勝之 2001 社会的スキルから人間関係の育成をはかる 倉戸ツギオ (編) 臨床教育心理学総論 ナカニシヤ出版 Pp.179-196.
- 山崎勝之・坂井明子・曾我祥子・大芦 治・島井哲志・大竹恵子 2001 小学生用攻撃性質問紙 (HAQ-C) の下位尺度の再構成と攻撃性概念の構築 鳴門教育大学研究紀要, **16**, 1-10.